

## まとめ

無藤 隆



### 【要旨】

動物飼育活動は、実際に見る触るなどを継続することで、動物を通して生物を理解し、やがて人間の「命の教育」に移行し道徳教育の一環となるなど、環境教育、自然教育、命の教育に位置づけられると考えられる。

例えば、世話をしてきた動物が死んだとき、死体に触り、死んだ理由を知りたがり、獣医師から科学的な説明を受けて、死の理由を知り、認識できる。また悲しみの中で、生き返らないと理解する。このような体験ができる動物飼育体験は、世話などの身体的な体験（体）、知識を得る、認識する体験（知）、愛情を抱き、悲しみを知る体験（情）に関わることになるが、指導者は、子どもが、今飼っている動物そのものと出会うという体験の中で、調べたり、動物と感情をやりとりしたり、愛情を感じ愛着を作っていくなどの体験を結んでいくように、求められる。また、動物飼育は、今多くの学校で見られるように、「好きな人に任せる」のではなく、日本のどこの子どもたちも、その成長の中で、どこかで動物飼育を体験すべきである。そのためには、カリキュラムの一環として、学校が明確にしていくべきだろう。なお、保護者の理解と関与には説明が欠かせないなど、体制づくりを推進することが必要である。

### 【全文】

この研究大会も11回を数えまして、毎年夏と冬に行われております。冬の方はそれぞれ実践された方々の研究発表が中心で、夏の方は、学校で動物を飼育していきたいという先生方に役立つ情報を伝えるという内容が中心であります。特に今回はそのことを強調しております。そういう意味で、午前中の中川さんの講演にありましたように、いかに簡単にしかも有益な動物飼育ができるかということについてお話しさせていただきます。

第三分科会、生活科での飼育活動についての分科会に少し参加させていただきました。その中で、動物のレンタルという話が出てきました。たとえば小学校のクラスの中で飼育してきた場合、年度が終わればそのクラスは解体されますので、継続して動物を飼うことはなかなか簡単ではありません。そこで、どうするかということですが、もちろん、次の学年に引き継ぐということも一つの方法であると思いますし、家庭に引き取ってもらうことも一つの方法あります。しかし、それがなかなか難しい場合、レンタルという方法が考えられるわけです。私自身、レンタルという言葉は適切でないと思いますが、そこから連想されることは、環境教育や命の教育を考えた場合、最も基本となる考え方は、われわれ人間が自然や地球の所有者ではなく、われわれ人間が、むしろ地球環境の一部であるということです。つまり、人間と動物との関係で言えば、われわれ人間が動物を所有していると言うよりは、われわれも動物の一員であるということが、もっとも基本的な考え方だと思います。しかしながら、目の前に動物がいれば、それを世話をするのは人間の責任であるわけですが、根本的な考え方は先ほど申し上げたとおりです。したがって、人間は動物を所有することはできない。動物の命を所有することはできないということになります。むしろ、われわれは動物の命を預かっている立場になります。誰から預かっているかと言うことですが、それは、自然界から預かっていて、ある期間、動物が死ぬまで一生懸命世話をする義務が

あるということです。そして、動物が死んでしまった後は、自然に返すということなのかなと思います。そういった意味では、われわれは命を預かることによって、命に預かる。「を」と「に」ということです。が、われわれも結局は地球上の生命体の一部であると言ふことを意味します。そういう感覚を最も基本に置いたいと思います。

その上で、子どもたちが動物を飼うということを通して何を経験させたいのか、そのためには何をしたらよいのか、このことが、午前中から午後にかけて論じられたことです。それはつまり、最も基本となることは、命というものは何なのか。それを具体的に知ることだと思います。われわれが生きていること、動物が生きていることはどういうことなのか。もちろん、子どもたちは外観的には生きているということはわかっていると思いますが、しかし、もっと具体的に考えると、生きているということは、ものを食べたり、排泄したり、息をしたり、動いたり、また、食べるということと排泄するということを分けることによって、それなりに清潔な場所で暮らしたり、さらに生きている限りその動物も成長したり衰えていったり、あるいは次の世代に生命を受け継ぐ繁殖をしたり。そういうもののちのより具体的な姿というものがあります。このことを子どもたちはどこまでわかっているのか。それは、いちばん良い例は「臭い」ということだと思います。子どもの中には、臭いから動物はいやだと思う子もいるでしょう。少し話は飛びますが、1歳くらいの子どもに絵本を読み聞かせたとします。その中に出てくる動物に子どもたちは親しみを感じると思います。しかし、実際に動物園に連れて行って本物の動物の前に連れて行くと、子どもたちは怖がることが良くあります。それはどうしてかというと、たとえば本物のゾウは巨大ですから、絵本とは大きく違います。それから糞もして、くさい臭いもします。そこで、特に臭いに敏感な子どもたちは、動物に接することを嫌がったりします。そういうこともあるのでしょうか。今圧倒的に人気なのは水族館です。水族館は、魚の生態がリアルに体験できるということですが、もう一つは、水族館には臭いがないのです。しかし、実際に触ってみると、水には臭いもありますし、魚はぬるぬる

しています。われわれは観念的には命や自然を大切にしなければいけないということはわかっていますが、実際に動物や自然を目の前にしたときに、本当にそれらを守ることができるでしょうか。そのためには、小さい頃から動物や自然に出会っていかないとなかなか難しいことです。つまり、五感が大切だということです。特に、触る感覚や臭いについて、小さい頃から体験させていく必要があると思います。私たちの文明社会は、圧倒的に視聴覚に傾いていて、十年二十年単位で見れば、ますますそういうことが進んでいくでしょう。水族館を見学する際にも、窓ガラスを通してするわけです。もちろん、北海道の旭山動物園のように、動物の生態そのものを観察できる水族館も増えてきましたので、それはそれで大切な経験です。しかし、子どもたちが自然や地球の一部であるという感覚をもつて、動物たちに接することができているかというと、それはなかなか難しいことだと思います。珍しい視聴覚体験で終わってしまってはいけないと思います。おもしろいテレビやゲームと大差ないのでないかと思います。すなわち、どこかで視聴覚体験とともに、触ったり、臭いをかいだりという、もっと基本的なベースとなる体験をさせる必要があります。しかも、触ったり、臭いをかいだりするという行為は、意志のコントロールがしにくい行為なのです。いやな臭いはどうしても嫌なのです。触った感覺がぬるぬるして嫌であれば、それはもうどうしようもないことなのです。このことは、年齢が上がるにつれて治りにくくなるようです。小さいうちからそういうことになじむことによって、許容量というものが広がっていくわけです。臭いをかいだり触ったりという経験を十分にすることによって、「嫌だ」という感覚は治っていくものだと思います。そういう意味でも、動物飼育が意味があることなのだと思います。命というものを感じるベースをつくっていくことができるのです。

もう一つは継続飼育ということです。そこで最も強調すべきことは、単に見ているだけではなくて、実際に関わらなければいけないということです。それは、日々関わることであり、自分が責任をもって飼育する相手に関わることであり、また、飼育を通して遊ぶ中で、楽しい気持ちをもって関わるということです。そ

のような関わりが動物飼育の中で起こります。大人の世界で動物飼育を見てみると、イヌやネコをペットとして飼う人が近年増えています。その中で、イヌやネコに服を着せたりしていることがあります、そういうことは、人間の一方的な愛情を、イヌやネコに注いでいるだけなのではないかと思います。要するに、自分の思うように相手を動かしたいという考え方の表れなのではないかと思います。幼稚園や学校で動物を飼う場合は、最初はかわいいという感覚から入りますが、次第に相手に気持ちを合わせていくようになります。世話をすること、相手が望むような行為をしてあげることです。動物飼育をする中で、動物たちが快適に暮らすにはどうすればよいかということがわかってきます。また、動物によって、関わり方も違ってきます。動物を世話するということは、子どもたちにとっては面倒なことではあるけれども、飼育を通して本当の生態を観察することができます。愛着が生まれたり、そして、相手に合わせた気持ちになれたりします。

このようなことをまとめてみると、体験するということと、知識を得たり認識すること、そして愛情を抱くということ。この3つの組み合わせで考えていく必要があると思います。そして、体験を通じてこの3つのことの繋がりを見出していくことも必要です。たとえば、飼っていた動物が死んでしまったとき、冷たくなっているとか動かなくなっているとかを感じることができ、そこに、体験の意味が出てきます。同時に、子どもたちなりになぜその動物が死んだのか知りたくなります。多くの子どもたちは、死んでしまった原因は自分にあるのではないかと思ったりします。だから、その死因を科学的に説明することが必要になります。その一方で、死ということに対して意味をもつためには、そこに悲しみがなければなりません。悲しみがあるということは、その前に愛情があるということです。そういう意味では、愛情と意識と体験が一体になって、死との出会いに大きな意味が出てきます。

以上のようなことでまとめとしたいと思いますが、あと一つ二つ加えたいと思います。一つは、この研究会の主張とい

うのは、学校現場の教員と獣医師と、私のような教育学に携わる者それぞれの間で繋がりをもつ必要があるということです。このことは、動物飼育はやりたい先生に任せることではなくて、どの学校のどの子どもも、動物飼育に関わるようすべきだという意味が含まれています。さらに、動物飼育がカリキュラムの一環として行われなければならないということで、かつ、その体制は学校全体でつくっていく必要があるということです。さらに、動物飼育には保護者の理解が必要不可欠で、休日の飼育などには保護者の協力が必要になります。したがって、今後さらに学校での動物飼育を取り囲む体制づくりが必要になってきますので、実践をさらに積み重ねていかなければならぬと思います。

もう一つは、動物飼育の要点として、動物を見ることから触ることに、触ることから継続することに、というキャッチフレーズで表されると思います。これが今回のテーマであると思います。さらに重ねていえば、動物から生物全体に広げ、そこから人間を含めた世界に広げていく。このことは、命の教育として非常に大切なことだと思います。動物飼育が道徳と関連づけられているのは、人間との関わりが大きいということからだと思いますが、この関連づけをどうしていくかということは、今後まだ検討の余地があると思います。

もう一つは、この研究会が学校における飼育動物に焦点を当てているわけですが、この活動が、自然教育や環境教育、命の教育などの全体の教育の中の一つとして位置づけられています。したがって、野生の動物、もっと広げて野生の動植物が暮らしている環境のあり方にも、視野を広げていく必要があると思います。教室のケージの中で動物を飼うことと、子どもたちが自然の中で動植物を探索していくこととどう関連づけていくのかということも今後の課題としてあると思います。

以上、私のまとめとしたいと思います。どうもありがとうございました。

(白梅学院大学大学院教授・中央教育審議会委員・全国学校飼育動物研究会顧問)